はじめに

関東、関西の難関私大の受験者向けの講座です。難易度の高い私大の過去問から、良質なものをセレクトしました。筆者はいずれも日本の学問界を代表するような面々であり、その論考は実際の入学試験でもよく出題されるものばかりです。この時期これらの問題にアタックし解説講義を聞くことで、受講生の現代文学力は高い水準に引き上げられます。

またこの講座を最大限実りあるものにするために、予習をし、自分の答案を作ってから講義を聞きましょう。

予習について

全講義予習しましょう。問題にアタックして解答をつくってから授業に参加してください。

復習について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。その後、スタディサプリのアーカイブの問題などにどんどんアタックしてください。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る　→　テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし**選択肢まで読んではダメ**。たとえば五択なら四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

（3　**論説では、本文最後の数行を先に**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）
1と2で充分な見当がつけば、4に移行してOK

4　**本文を冒頭から読む**
プランA……設問の傍線部や空欄にあたるたびに、それらを含む段落を読んでから解答する。選択肢などは、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読み通さないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。
プランB……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　※**句点なし！**（1点減点）

設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則

ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものはつけない）

c

…	…	…	こ	と。

→　※**句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（AではなくBである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇒ 心身
語句 ← 心身の一体性

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

⇒ 一文・文

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手に持ち込んだり、「**C↔D**」といった本文にない対比を持ち込んでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比を持ち込み、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小**(わいしょう)**化**があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為(とうい)判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なしの誤り** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味づけをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13 **具体例は、一段、落ちる** ……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14 **比喩による説明は、一段、落ちる** ……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

目次

第一講 〈論説〉言語論・認識論・哲学論……鷲田 清一 p.8
第二講 〈論説〉政治論・国際政治論・国家論……杉田 敦 p.16
第三講 〈論説〉時間論・比較社会論……真木 悠介 p.24
第四講 〈論説〉メディア論……原 研哉 p.30
模範解答……p.41
復習問題解答……p.47

第一講〈論説〉言語論・認識論・哲学論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

もうだれも口にしない言葉だが、何かが誕生することはもともと「うまる」と言った。「生む」（産む）という他動詞に対して、「生まる」という自動詞があった。「切る」に対する「切れる」、「冷やす」に対する「冷える」、「散らす」に対する「散る」のように。それがいつからか、「生まれる」と言うようになった。

考えてみればしかし、「生まれる」という自動詞は、「生む」（産む）という他動詞の受動形でもありうる。「生まれる」とははたして自動詞なのか他動詞なのか。言語史に疎いわたしには、その間の事情はよくわからない。そこで、日本語についての疑問が湧くといつも訊ねる日本語の専門家、金水敏（きんすいさとし）氏に教えを請うた。

金水氏の説明はこうである。日本語においては、他動詞は対象に対する働きかけを、自動詞は対象の無意志的な変化を表わす場合が多い。「うむ／うまれる」も当然、他動詞／自動詞の対として認識されているが、「うまれる」の語形は受動の語形でもある。ただし、日本語の場合、受動文は、たんに「他者の作用を受ける」という受け身の意味を表わすのみならず、それを受ける主体の感情や意志をも表現するための表現形式として発達してきた……。これを前置きとして、氏は実例をひとつあげた。

「テストの時、監督の先生にずっとそばにいられて困った。」

このとき、「いられる」という受動のかたちで、話者の□感情が表わされている。あるいは、「多くの人に愛されたい」というときのように、受動形で主体的な意志を表わすことすらある。日本語において、受動文とはじつは主体性の強い表現なのであり、それゆえに、人間を代表とする有生物を主語とするというのがつねである。しからば、と次に決定的な言葉が続いた。

「この点から見ると、〈うまれる〉とは、たんに〈うむ〉という行為の結果として生じる客観的な出来事というよりは、産み落とされる側のその A 立場に身を寄せた表現であるといえる」、と。

畳みかけるように、説明が続く。

たとえば次のような表現の対を見てみよう。「うみたての赤ちゃん」と「うまれたての赤ちゃん」。わたしたちは、産む母の

側に身を寄せた「赤ちゃんをうむ」という表現が使えるのに、「うみたての赤ちゃん」とは言いにくい。これは、すでに生まれている赤ちゃんのほうを表現の中心に据えたばあい、産んだ母よりも、赤ちゃんの側の主体性に着目した「うまれる」という表現がよりふさわしいと感じられるからである。このことは、次の例からも明らかである。ひとは「うみたての卵」とは言うが、「うまれたての卵」とは言わない。が、ひよこについては、「うみたてのひよこ」とは言わず、「うまれたてのひよこ」と言う。これは、卵のばあい、それを表現の中心に据えたとしても、卵に身を寄せた表現を取ることができないからだ。わたしたちは、親鳥の主体性を感じ取ることはできても、卵の主体性を感じ取ることができない。しかし、卵からかえったひよこには主体性を認めることができるので、「うまれたてのひよこ」という表現が可能となる。一点の淀みもない説明である。そしてこのあと、氏は「そもそも親鳥はひよこを産むわけではないのだから、『うみたてのひよこ』など言わずもがなという顔をしてこうつけ加えた。と言えようはずがない」、と。

「うまれる」が自動詞でありながらなぜ受動のかたちをとるのか。その答えは以上のごとくである。決定的なのは、「〈うまれる〉とは、たんに〈うむ〉という行為の結果として生じる客観的な出来事というよりは、産み落とされる側のその立場に身を寄せた表現である」という点である。つまり、ある存在をその存在のほうから見るということ。「生まれる」とは、産んでもらったという含意を強くもつ。このことをまるで純然たる自動詞のようにとらえる現代人は忘れている。〈わたし〉の存在はその出生の時点からして、与えられたものであるということを、である。それだけではない。人間はだれしも、早産というかたちで、いわば未完成のままこの世に生まれ出てくる。他の哺乳類のように、生まれてすぐにみずからの脚で立つことはできない。その生命の維持のためには、そもそもが他者による介助を必要とする存在なのである。

それだけではない。〈わたし〉の名は他者によって与えられる。わたしたちは他者から授かった名を生きる。

さらにそれだけではない。〈わたし〉という存在の看板である顔もまた他者から与えられる。顔ははじめからついているではないかと言うむきもあろうが、B<u>わたしの表情は他者によって分節される。</u>このことは、乳児を前にした母親の態度を思い起こせばよくわかる。母親は、端から見ていて恥ずかしくなるくらいに、「口を大きく動かし、頭をうなずくように振り、目を見ひらき、おおげさな身ぶりで赤ちゃんに語りかける（空間的な誇張）」、「ことばやしぐさが、スローモーションをかけたように、ゆっくりになる（時間的な誇張）」、「笑い、驚き、眉をしかめる（情緒的な誇張）」（下條信輔『まなざしの誕生』より）。このよ

うな母親の対応は、子どものなかで発生しかけている志向性にシンクロナイズし、それを増幅するというかたちで、子どもの経験や表現の分節化を助長するものであろう。子どもの潜勢的な志向性に対するC母親のこうした増幅された送り返しのなかで、子どもは世界との関係をすこしずつ理解してゆく。身につけてゆく。

が、さらにさらに、それだけではない。〈わたし〉というものは、どのような他者のどのような他者でありえているかということによって決まる。〈わたし〉という存在が危機に瀕するのは、〈わたし〉がいかなる他者の意識の宛先ともなりえていないときである。いてもいなくても他者になんの影響もおよぼすこともないじぶん、そのような存在はなきにひとしい。そうひとは感じる。愛情や好意の対象でなくてもいい、憎しみの宛先であっても、鬱陶（うっとう）しい対象とされてもいい、それでも他者が無視できない存在としてわたしがあるときには、〈わたし〉は存在する。が、いかなる他者にとっても関心の対象ではない存在になったとき、もはや見棄てられる存在ですらなくなったとき、ひとはD〈わたし〉を喪う。

（鷲田清一『死なないでいる理由』角川学芸出版による）

問１　空欄□にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選びなさい。

1　怒りの　　2　控えめな　　3　あいまいな
4　被害の　　5　あきらめの

問２　傍線部Ａ「立場に身を寄せた表現」について。その説明として最も近い意味を表すもの一つを、左記各項の中から選びなさい。

1　弱さを気遣う表現　　2　主体性を認めた表現
3　成長を期待する表現　　4　未来を懸念した表現
5　誕生を祝福する表現

問３　傍線部Ｂ「わたしの表情は他者によって分節される」について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選びなさい。

１　相手によって一つひとつの表情が創られること
２　表情と行為が明確に区分けされること
３　自分の表情にそれぞれの名前がつけられること
４　相手の表情と自分の表情を区別すること
５　自分の表情に相手が意味を与えること

問４　傍線部Ｃ「母親のこうした増幅された送り返し」について。母親の送り返しの具体的な例として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選びなさい。

１「いない、いない、ばーっ」
２「ジュースがおいしいねー、おいしいねー」
３「泣かないでね、いい子だから」
４「ママはあなたといるのが一番うれしいのよ」
５「いたいの、いたいの、とんでいけー」

問5　傍線部Ｄ「〈わたし〉」について。ここで言う〈わたし〉の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えなさい。

イ　他者によってうみ出され、他者によって無化されるわたし
ロ　受動的でありながら意志的に世界に関わっているわたし
ハ　生まれたときから高齢になるまで他者の介助を必要としているわたし
ニ　他者によって意味のある対象とされ、関与されるわたし
ホ　他者によって表情や感情などを形成されている受け身のわたし

問6　左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えなさい。

イ　日本語において受動文は主体的意志や感情を表すことがある。
ロ　人は人間関係の中で誕生し捨て去られていく。
ハ　哺乳類は人間を含めて早産で誕生する。
ニ　一般的に私たちは産む側の立場に立って認識している。
ホ　私は他者の関心の対象となることで自分の存在を確認する。

第一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　鷲田清一＝わしだ　きよかず（一九四九〜）京都府生まれ。京都大学文学部卒、同大学院博士課程修了。大阪大学総長、京都市立芸術大学学長を歴任。日本を代表する哲学者。朝日新聞朝刊の連載「折々のことば」の筆者

●金水敏＝きんすい　さとし（一九五六〜）大阪府生まれ。東京大学文学部国文科卒。同大学院人文科学研究科博士課程中退。大阪大学教授。日本語学・言語学の研究者

語句

疎い＝うとい→あることに対して的確な判断を下すほどには知識や経験がない様子。また人間関係が親密ではないという意味もある

言わずもがな＝いわずもがな→言うまでもなくわかっていることだが

含意＝がんい→直接的表面的な意味にくわえて別の深い意味を含んでいるということ

分節＝ぶんせつ→ひとまとまりのものを部分に分けること

cf.文節→文の発音上の区切り

志向性・指向性＝しこうせい→心がある方向に向かうこと

シンクロナイズ＝同期すること

潜勢的＝せんせいてき→はっきり表面には出ていないが可能性として潜んでいる

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）この言葉には隠れたガン意がある　①雁　②含　③顔　④玩　⑤元

（イ）忍耐強く関係をイ持する　①威　②委　③囲　④緯　⑤維

（ウ）対象を分セツし詳しく説明する　①説　②切　③節　④接　⑤設

（エ）従来のタイ度を悔いて改める　①耐　②対　③待　④態　⑤滞

（オ）表現をコ張せず素直に語る　①誇　②弧　③粉　④鼓　⑤糊

（カ）新しいカン板に交換する　①監　②観　③看　④患　⑤敢

（キ）西欧重視というシ向性がある　①詩　②師　③思　④志　⑤至

（ク）力を増フクして伝達する　①複　②副　③覆　④復　⑤幅

（ケ）内面的な危キを克服する　①期　②機　③喜　④記　⑤奇

（コ）情チョが激しく揺さぶられる　①著　②貯　③猪　④緒　⑤躇

第二講〈論説〉政治論・国際政治論・国家論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

二〇〇一年九月一一日、アメリカ東海岸への同時テロ事件が起こり、崩れ落ちるツイン・タワーの映像が世界中で繰り返し放映された。この事態をきっかけに露出したのは、一般の人々の間にただようある種の不安感である。これは、単に戦争やテロリズムに巻き込まれたらどうしようという不安であろうか。もしそうなら、それは一過性のものであり、（1）忘れるのたとえ通りに、大規模なテロの記憶が薄れるにつれて、日常性が回復されていくことであろう。しかし、そう簡単に事は収まりそうにない。今回、人々は、一瞬にせよ深淵（しんえん）を覗（のぞ）き込んだからである。これまで前提とされていたことの多くが、実は必然でも何でもなく、偶然の上にあることを知ってしまった。もう元には戻れない。このことは、さまざまなレヴェルで言えるが、ここでは政治の組み換えに注目したい。人々が当然と見なしてきた政治的枠組みが、もはやその自明性を失いつつある。政治の意味そのものが変わりかねないのである。

政治とは何かについては、もちろんいろいろな考え方があるが、近代の政治は、境界線によって支えられてきた。地面の上にヴァーチャルな線を引いて、ある領土（テリトリー）を囲い込む。こうした空間的な囲い込みは、単に物理的に空間の利用を限定するにとどまらず、その空間内で起こる出来事についての最終的な決定単位としての主権の観念と結びついてきた。領土を持つ（テリトリアル）国家が、その領土内のすべての事柄について、管轄するものとされたのである。領土内の事柄について、境界線の外部から口を出すことはできないし、境界線の内部に、国家に対抗できる勢力もないというのが、主権の意味である。そして、こうした主権国家が境界線を接してひしめき合うことによって、一種のモザイク状態が生まれ、それによって、管轄されない事柄、決定権力の及ばない領域などはなくなるものと想定されていた。これが、地球を国家（ステート）によって管理するという枠組みにほかならない。

こうした空間的な囲い込みに伴い、もう一つの囲い込みもまた進行した。人間の群れの囲い込みである。特定の人々を国民（ネーション）として囲い込み、それらの人々の運命に特別の関心を寄せることが一般的になった。境界線の内部の群れが大き

くなり、より健康になり、より豊かになることが国益（ナショナル・インタレスト）とされる。そして、国家は国益の守護者としてふるまうというのが、国家理性の観念である。国家理性は、普遍主義的な配慮につながるものではない。むしろそれは、境界線の内部からさまざまな問題やリスクを外部に排出することによって、内部の最適化を図るものである。その意味で、国家理性は本来的に（2）である。政治の目的を、「人が人に対して狼である」自然状態からの離脱に見出したホッブズこそは、近代の政治的な枠組みを最も鮮明に示した人物である。しかし、ある境界線の内部から自然状態を排除することは、境界線の外部との間に自然状態を生み出すことと引き換えであった。国内政治と国際政治は、こうして表裏一体のものとして成立する。

しかしながら、そのように境界線によって内側と外側を区別し、国内政治と国際政治を区別するという手法自体が、今回の事態によって問われることになった。何らかの閉じた全体性（トータリティ）が成り立つとは信じられなくなったのである。境界線はほころんでいるのではないか。そして、内側にいると思っていたらいつの間にか外側にいて、外側のはずが内側になるという状況になっているのではないだろうか。

まず、リスクを「国境線で食い止める」ことができないのではないかという不安が生じている。かつては水際で守っていれば、外国からの攻撃は内側には来ないとされていた。たとえ国境線が侵犯されても、従来の戦争なら、敵が首都に到達するまでには時間があった。空間的な距離が、心理的な安全感覚と連動していたのである。ところが、一連のテロ事件によって、国境線の内側で突然戦闘行為が起こりうることが明らかになった。世界的な覇権国家の中心部がいきなり攻撃されるという事態は、幾重にも緩衝地帯を設ければ内側を守ることができるという確信をうち砕いたのである。さらに、例えば郵便のような日常的な制度が大きなリスクを運びうることも判明した。これは、コンピュータ・ウィルスを用いたサイバー・テロなどと共に、ネットワークでつながった現代社会が、何らかの障壁によって守れないという印象を強めるだろう。

こうした外部に対する不安感は、さらにもう一つの、内部的な不安感と連動する。すなわち、国境の内部に（3）性があるという事実を、多くの人々が不安材料として意識し始めたのである。国家理性は、国民という群れが、基本的に同質的なものであると信じさせようとしてきた。実際には、どんな国民集団も、最初からさまざまな差異を内部に含んでいたのだが、国民国家は、教育を通じて公用語を強制し、国民文化を確立することなどによって、同質性をつくり出したのである。そして、ひとたび一定の同質性が形成されると、それはずっと以前から存在していたかのように考えられる。こうした国民の同質性は、人々が共

存していくための不可欠の条件ではないにもかかわらず、まるでそうであるかのような考え方が力を持っている。さまざまな人々が一緒に暮らしていることは、それ自体として困ったことでも異常なことでもない。しかるに、ある人々によれば、少数民族や移民集団の存在こそが、リスクを増大させる元凶なのである。テロリズムは実際には「われわれ」全てにとっての問題であり、決して特定の集団だけのものではない。オウム真理教のような集団が、いわゆる先進国の、しかも高学歴の人々の中から出て来たことを想起すれば、それは明らかである。しかし、今回のような事件が起こると、「われわれはこんなことはしない。こんなことをするのは彼らだけだ」と、誰かを悪の根源と見なすような考え方が広まる。

こうして、漠たる不安感を背景に、不安をぬぐうための「セキュリティ（安全）の政治」とも言うべきものが前面に出て来る。そこではまず、最近のこの国に見られるように、軍事がにわかに脚光を浴びる。軍隊を派遣して戦争することが、テロ対策として常に有効かどうかははなはだ疑わしい。にもかかわらず戦争が注目されるのはなぜか。それは、戦争が境界線をつくり出すものだからである。戦争は、敵味方がはっきりしていなければできない。誰を守るべきであり、誰を殺してもよいのかがあいまいなところでは、軍隊が動くことはできない。したがって、戦争をするためには、境界線を明確にせざるをえないわけである。逆に、境界線があいまいな時には、軍事的な論理を持ち出すことによって、境界線を確立することができる。境界線の再確認をしたいがために危機を演出する人々さえ出てきかねないのである。

同時に、国境線の内部から「他者」を排除することによって、国境線を内側から回復するという論理もあらわれる。ある種の民族、ある種の宗教の信者、ある種の思想を持つ人々を、「潜在的なテロリスト」と決めつけて排除したり、どこかに収容して規律化したりする。そのことによって、内部の同質性を確保し、セキュリティを確保しようとするわけである。電話や電子メールなどの盗聴、あるいは「個人情報管理」という名の情報統制が、すでに行われつつあるのである。

境界線を守って内部を最適化しようとしているのは誰か。こうした政治が、単に一部の「権力者」の陰謀にとどまらず、国民のかなりの部分によって支持されうるということを意識する必要がある。境界線の政治が支持されてきたのは、生活を守りたいという人々の欲求にそれが合致していたからである。抽象的な理念の実現のために、人々が常に動くとは限らない。しかし、安心して生活できるようにしてほしい、それには多少の権利制限や治安強化は甘受するという「草の根のセキュリティ要求」は、今後身近なところで事件が起きたりすれば、急速に強まりかねないのである。

われわれは、これとは別の考え方を、どこまで示せるだろうか。一つには、セキュリティ要求が、自己破壊的、あるいは自己否定的な側面を持っていることを明確にすべきである。治安対策は、一般の人々には影響しないという考え方が根強い。きわめて（3）な「悪い」連中が排除されるだけだとタカをくくる人が多い。しかし実際には、ある人々が排除されても安心することはできず、今度は残された群れの中から別の人々が排除される。こうして、結局、最後の一人が消滅するまで、社会の中からリスクをゼロにすることはできないのである。こういう粛清の循環が始まったらどうなるのか。実際それに近いことはこれまでも起こりかけたし、決して絵空事ではない。テロを「根絶する」という言葉が含む（4）を意識すべきである。

もう一つ言わなければならないのは、境界線の回復という目的が、そもそも実現不可能であることである。経済的、文化的な結びつきや、人の往来などがますます増える中で、「外からの影響を入れない」、あるいは「他者と接触しないように立てこもる」ことは、とうてい無理である。もはや、どんな政府といえども、重要な事柄について、国境の外部との相談や交渉なしに勝手に決めることはできないし、許されない。例えば、主権国家が、主権があるからといって、自分たちの国民経済を排他的に管理することなどできるだろうか。中央銀行が何を言おうと、外部に開かれている市場はそれに従うとは限らない。経済の規模は、すでに一国の財政・金融政策が管理できる範囲を越えているのである。文化政策についても同じことが言える。国民という単位が前提としてきた、国民の文化的な同質性ももはや限定的なものでしかない。文化は国境を越えて流通しつつあり、それを制約しようとするあらゆる試みは失敗せざるをえない。

要するに、現在の状況は、国内政治と国際政治の間の境界線が維持できなくなって、ややカール・シュミット的な表現をすれば、「内政の外政化」と「外政の内政化」が同時進行しているのである。この事態をどうとらえるか、その認識の仕方が大きな分かれ目になるような気がしている。

（杉田敦『境界線の政治学』による）

注　ヴァーチャル……仮想的

ホッブズ……十七世紀イギリスの政治思想家

カール・シュミット……二十世紀ドイツの法学者、政治学者

問1　空欄（1）に適当な語句を入れ、「一過性」を表すことわざを完成させなさい。

問2　空欄（2）（4）に入るもっとも適当な語をそれぞれA~Eの中から選び、符号で答えなさい。

（2）　A　寛容　　B　頑強　　C　正統　　D　絶対　　E　偏狭

（4）　A　トータリティ　　B　ネットワーク　　C　セキュリティ

D　テロリズム　　E　リアリティ

問3　空欄（3）に入るもっとも適当な語を漢字二字で答えなさい。（楷書で正確に書くこと）

問4　次のア~オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符号で答えなさい。

ア　歴史的に同じ文化を共有してきた地域が国民国家となった。

イ　現代社会では国家内部の同質性を維持することは不可能である。

ウ　国境線を守っていれば安全は確保できるという時代は終わった。

エ　境界線を取り払えば世界における文化と経済の交流が推進される。

オ　国民の側からセキュリティを追求することで、安全が確保される。

第二講　知識モノ解説

文学史・筆者紹介

●筆者　杉田　敦＝すぎた　あつし（一九五九〜）群馬県生まれ。東京大学法学部卒。同大助手、新潟大助教授などを経て法政大学法学部教授。政治学・政治思想史の研究者で日本政治学会理事長なども務めた

語句

自明性＝じめいせい↓説明や証明をするまでもなくわかりきっていること
管轄＝かんかつ↓権限によって下部の組織を支配、運営すること
普遍＝ふへん↓いつでもどこでもあてはまること
覇権＝はけん↓圧倒的な支配権。英語のヘゲモニーやスプレマシー
緩衝＝かんしょう↓衝突の衝撃を和らげること
元凶＝げんきょう↓悪事のおおもと。諸悪の根源
統制＝とうせい↓自由を規制しコントロールすること
甘受＝かんじゅ↓いやなものをしかたないとして受け入れること
タカをくくる＝高を括る↓たいしたことはないと油断する。見くびる
粛清＝しゅくせい↓組織内部の反主流派などを徹底排除すること。政治的な敵を抹殺すること
制約＝せいやく↓縛ること

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）厚生労働省の管カツ下に入る　①括　②割　③轄　④活　⑤渇
（イ）相手へのハイ慮を十分にする　①配　②俳　③杯　④拝　⑤輩
（ウ）二酸化炭素のハイ出量を減らす　①廃　②灰　③排　④肺　⑤敗
（エ）権力のハ権争いに巻き込まれる　①破　②派　③把　④波　⑤覇
（オ）緩ショウ地帯で激突を避ける　①衝　②賞　③渉　④傷　⑤礁
（カ）関税ショウ壁で国内産業を守る　①障　②章　③症　④将　⑤荘
（キ）問題の元キョウを指摘する　①狂　②恐　③教　④凶　⑤脅
（ク）セン在的な能力を引き出す　①洗　②潜　③千　④先　⑤宣
（ケ）国家的なイン謀を調査する　①引　②陰　③因　④韻　⑤淫
（コ）失敗の辛苦をカン受する　①勘　②完　③甘　④寒　⑤敢

第三講〈論説〉時間論・比較社会論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

こんにち日本語のなかで暦の時間を区切る単位は、日、週、月、年がおもなものである。週の使用はもちろん近代になってからだから（初伝来は十二世紀にまでさかのぼるが）、ヒとツキとトシとが固有のものだ。このうちヒは太陽の、ツキは月のうごきを示していることはいうまでもない。それではトシはどこから来るのか？

トシとは元来、イネのみのりをあらわしていた。人名などで稔という字を、トシとよませるのはそのなごりである。その年の収穫だからイネのみのりをトシとよぶのではない。［（1）］

このことは中国語でもおなじで、年という文字は元来、穀物を示す禾を頭につけた人物、すなわちみのりの擬人化である。多くの原始共同体において、現実的な未来の長さが数ヶ月ないし一年の限度であるのも、人間にとって長期の未来への最初の切実な関心をよび起こすのが、農業生産であるからであろう。農耕においてはじめて人間は、相当長い未来に手にしうる結果のために現在の生を手段化するという、(2)ひきのばされた時間性の回路を張りながら生きることになる。

それは近代の工業社会の、抽象的に無限化された時間からみると、トシのイメージにもあるように、なお［（3）］と［（4）］を失っていない。けれどもそれは狩猟や採集の時期とくらべると、すでに飛躍的に間接化された［（3）］である。

予祝という、この時期の日本人の時間意識の構造を凝縮している行為は、このとおい未来の収穫の確実さへの、祈念の切実さということをぬきにしては理解しえない。

予祝とはいうまでもなく、春の農耕の開始に当たって、秋の収穫を予め祝うのである。平野仁啓が『続　古代日本人の精神構造』で論じているように祈年祭とは、まさしくこのように、その一年の労働の意味に他ならない秋の稔りすなわちトシを、春にあらかじめ祝ってなされるミトシハジメに他ならなかった。

この予祝儀礼によって設定される、聖なる時間と俗なる時間とのいわば「平行関係」について、平野はつぎのように書いている。

祈年の祭によって発動したミトシノ神たちの行為は、聖なる時間においてそのまま働きを持続するのである。小正月の予祝儀礼において、半年を越える未来の刈り上げの豊作を表現しておくことは、未来の収穫期にそれが実現することを約束されることである。聖なる時間において実現されたことは、現実に対する規範として影響しつづけるのであって、現実はそれを模倣する、と信じられたのである。図式的な言い方をすれば、(5)設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れているのである。例えば、田の神を、俗なる時間と平行して流れる聖なる時間の神格化された象徴と見立てるならば、この場合の聖なる時間と俗なる時間との在り方がよく理解されるはずである。

すなわちその年のはじめに未来をあらかじめ現在化せしめる儀式が、未だ来ぬトシに向って辛苦しつづける労働の日々をとおして臨在し、(6)〈現在しつづける過去〉の規格をこの未来に与えるのである。くり返しいえば、それはその年の長期にわたって外化された労働の意味に他ならない未来を既定の過去として設定することによって、これを現在しつづけるものとするのだ。

（真木悠介『時間の比較社会学』による）

問１　空欄（１）に入れるのにもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

A　むしろ、繰り返されるみのりであるからこそトシとよんだのだ。
B　反対に、イネのみのりが一度あることをトシとよんだのだ。
C　かえって、その年にえられた収穫そのものをトシとよんだのだ。
D　逆に、その年限りのみのりであるからこそトシとよんだのだ。
E　じつは、イネのみのりを願うという行為をトシとよんだのだ。

問２　傍線（２）「ひきのばされた時間性の回路を張りながら生きること」について、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　農耕においては未来に収穫が得られるかどうか不確実であるから、できるだけ労働する時間を引きのばしていくこと。
Ｂ　農業生産ではその時々の労働に意味づけせずに、未来に収穫という成果を得ることを目的とすること。
Ｃ　短期間で成果を得られる狩猟などと違い、農耕では未来の成果を得るまでに単調な労働の時間を覚悟していくこと。
Ｄ　農業生産では不確実な未来への不安を超克するために、その時期の労働に独自の価値をおいて重要視すること。
Ｅ　農耕ではその時々の労働をそれだけで考えるのではなく、未来に得られる収穫と関連づけながら考えていくこと。

問３　空欄（３）（４）に入れるのにもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　確実性　　Ｂ　抽象性　　Ｃ　具体性　　Ｄ　完結性　　Ｅ　時間性

問４　傍線（５）「設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れている」について、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　日々農民が田において行う労働それ自体が、神の行う聖なる働きの象徴であると考えられていること。
Ｂ　神に豊作を祈ることで、聖なる存在である神が農耕という労働をつかさどる世俗的な存在になること。
Ｃ　祈年の祭で神が実現した豊作が、日々行われる農民の労働の結果としてあらわれること。
Ｄ　刈り上げの豊作を祈るという聖なる儀礼のなかに、収穫による利益を求める農民の願望が隠されていること。
Ｅ　祈年の祭では豊かな収穫が約束されているが、実際の収穫は天候など現実の状況に左右されていること。

問5　傍線（6）「〈現在しつづける過去〉の規格をこの未来に与える」について、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

A　過去の収穫において繰り返し得られた経験が、祭を通して未来の豊作を確実にするために生かされていくこと。

B　豊作が実現するという祭をあらかじめ行うことで、現在の労働を豊作を実現した過去の労働の再現にすること。

C　祭をすることで現在の労働の苦労が過去の労働とつなげられ、そのことで過去の豊作も未来につながること。

D　豊作の祭をあらかじめ行うことにより、それが日々の労働を意味づけ、未来の豊作の保証にもなること。

E　過去に行われた祭が豊作を実現したように、現在も祭を行うことで未来において豊作が実現されること。

第三講　知識モノ解説

文学史・筆者紹介

●筆者　真木悠介＝まき　ゆうすけ（一九三七〜）東京生まれ。東京大学卒。同大学大学院博士課程単位取得退学。真木悠介は筆名で本名は見田宗介（みたむねすけ）で日本を代表する社会学者。主著『現代日本の精神構造』『現代社会の理論』など

語句

規範＝きはん→守るべきルール
聖＝せい→神や信仰にかかわるもの
俗＝ぞく→日常の暮らしにかかわるもの
擬人化＝ぎじんか→人間でないものを人間であるかのように見なすこと
神格化＝しんかくか→神ではないものを神のように見なすこと
臨在＝りんざい→すぐそばにあるということ

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）日本にコ有の問題がある　①個　②孤　③小　④固　⑤古

（イ）農コウに適した土地を探す　①鋼　②公　③候　④興　⑤耕

（ウ）自然現象をギ人化する　①擬　②偽　③儀　④疑　⑤戯

（エ）シュ猟採集生活から出発する　①種　②守　③首　④狩　⑤取

（オ）先人の行為を模ホウする　①倣　②方　③法　④放　⑤報

（カ）多くの知恵をギョウ縮する　①形　②仰　③業　④凝　⑤暁

（キ）格式ばったギ礼を重視する　①技　②儀　③犠　④議　⑤義

（ク）小麦の収カク量を増やす　①獲　②確　③拡　④画　⑤穫

（ケ）王位の継承者を神カク化する　①閣　②核　③格　④郭　⑤隔

（コ）これまでのキ定路線で行く　①着　②企　③既　④軌　⑤帰

第四講〈論説〉メディア論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

紙か電子かという問題もあるが、ツイッターの登場で「大量発話時代」が幕を開け、情報の流れに新たな変化が起きた。電子ブックにしても著者から版元、メディアを通して読者へという情報の流れは変わらないが、大量に発話され大河のような流れをなす夥しい言葉の断片を情報の「資源」ととらえるなら、これは従来の流れに逆行する新たな情報源の誕生を意味する。

一例として典型的な旅行ガイドブックを想像してほしい。編集側が入手した情報のみならず、旅行者の投稿を活用するこの種の旅行ガイドは、体験に根ざした情報だけに［A］があって、自主的に動いていく旅行には欠かせないものであった。分厚い書籍はかさばるので、旅のエリアに応じて本を分割して、必要なところだけ持っていくようなことがよく行われてきた。iPadなどのタッチパネルデバイスの登場は、この分厚い本を持ち歩くことから旅行者を解放してくれることだろう。これはこれで便利である。しかし、電子ブックはそこで終わらない。旅の情報が実際に旅をしてきた人たちの体験に近づくほどリアリティを持つなら、情報ソースは、過去に旅をした人から寄せられるデータよりも、むしろ「今、旅をしている人たち」からもたらされるものの方が信憑性が高い。だから電子ブックは「今」を取り込もうとするだろう。

たとえば、陸路でインドに入ろうとしている旅人に、インドとパキスタンの国境の町に今いる人のつぶやきは限りなく貴重である。治安状況は刻々と変化しているからである。あるホテルに六ヵ月前に宿泊した経験を持つ読者の投稿はそのホテルを評価する上で貴重な情報源だったが、そこに「今、泊まっている」人のつぶやきのリアリティには及ばない。今は雨期で、快適なはずのホテルにも雨漏りが発生しているかもしれないからである。

ツイッターのような不安定な情報でも、それをつまみ出して整理するしたたかな編集感覚を働かせるなら、そこにユニークな旅行ガイドが生まれる可能性がある。「旅行ガイド」はあらゆる書籍の比喩である。新たな情報の源泉や流れを把握した編集は、ユーザーの能動性と連携し、読者からさらに新たな情報資源が生み出されていく。この関係には今後も注目が必要だ。

(ア)<u>都市もこれからますます「読み物」になっていくだろう。</u>目指した映画館やショップにたどり着くだけではなく、都市と

いう未知なる出来事の塊(かたまり)の中から自分にとって好ましい情報をタイムリーに読み出してアクセスできるなら、都市はその深奥まで利用可能になる。

地図や買い物ガイドのような、あらかじめ編集された情報ではなく、情報端末から都市が読み出せるようになったらどうだろう。［ B ］、おなかがすいているときに、「三人」「カジュアル」「十九時」「イタリアン」などと、項目を選択するだけで、今いる都市エリアから、該当するレストランを精密に読み出すことができたら便利である。あるいは、花を買おうと思い立ったときに、「野草」「切り花」「茶事」などと、希望条件を選択するだけで、歩いていける距離にある花屋が複数件紹介されるような仕組みができてくると、都市の使い勝手はさらによくなる。映画にしても、セールの情報にしてもマッサージにしても同じことだ。

都市は膨大な情報で出来ている生命体のようなものだ。それを読み出す「編集」の創造性が増す、［ C ］血流が加速するなら、都市はいっそう細やかに成長していくだろう。表通りに面した一等地にのみ客が集まるのではなく、裏通りの小さな店の存在や魅力を読み出すことができたら、街はさらに奥深く分岐していく可能性を持つだろうから。

また、都市を今、歩いている人たちの多くは情報の発信者でもある。大量に発話された情報を目的に合わせて閲覧することもできる。メディアの充実と、タッチパネルデバイスの充実は、書籍の可能性のみならず、情報の流れや編集の可能性を確実に変えていくものであり、これによって個人が手にする情報の量や行動の可能性を飛躍的に拡大させていく。

［ D ］、人間の幸福が、メディアの進展に伴って飛躍するかどうかはわからない。情報や選択肢が爆発的に増えたからといって、それだけよりよい人生が送れるという保証はない。卵を五十万個差し上げますと言われても、あまりピンとこない。とても食べきれないし、そんな量を抱えること自体が落ち着かない。人が賞味できるのは常に一つの卵であって、それを何分ボイルし、どの程度の半熟かを吟味し、どんなエッグスタンドに立て、いかなるソルトシェイカーで塩をふりかけ、どのような銀のスプーンでそれをすくって食べるかが人生なのである。そこを踏まえつつ、飛躍的に増える情報の行方に目を凝らさなくてはならない。

電子ブックの登場で、テキストの管理・保存が楽になり、それを読みたい人にスムーズに提供できるようになると、紙の本のように手間のかかる方法で存在を許されるテキストは減少するだろう。電子ブックなら限りなくローコストで流通させられるのだから、平均的なコンテンツなら紙に刷る必要はない。情報文化の周辺に発生する新たなコモンセンスによって紙の本は減る。

しかしその速度は想像しているより早くないかもしれない。人類が、書物のようによく出来た、そして慣れ親しんだメディアを手放すには相応の時間がかかるのだ。

一方で、「本になる」というのは徐々に希少価値になっていく。言葉と紙の書物にとって(イ)この傾向はむしろ望ましい。ここしばらくの間、作れば売れるということもあってか、本にならなくてもいいような雑駁なテキストが、深く顧みられることもなく次々と紙に刷られてしまった。だから本の尊厳が下落して、そのほとんどは電子ブックに置き換えられうると錯覚されるほどの存在に成り果てていた。

おそらく出版社の数は減り、書店の数も減るだろう。しかし生き残った出版社は安易に本を制作することを慎むようになり、出版への覚悟と意志を明快に書籍に表現するようになるはずだ。書物として所有したいと意欲されるような魅力に満ちたテキスト。希有な業績であると誰もが認める内容。さらには、吟味されたタイポグラフィや装丁が醸し出す物体としての風格や尊厳。そういったものが、紙の書籍に再び求められるようになるだろう。だから「紙の本」は祝福された情報のかたちとして、新たな重みを獲得するはずである。著者も自著が電子ブックにとどまらず「紙の本」へと出世することを密かに期待するようになる。

書店も、ただ漫然と売れ筋から本を並べるような書店はネットストアに取って代わられるが、一方では個性的な品揃えや、創意に満ちた並べ方を工夫する「知のセレクトショップ」のような書店が注目されるはずだ。これからの店は、小さくても主張に理があれば必ず見つけ出され、それを求める顧客と結びついていくのである。

逆にこんなことがおこるかもしれない。個人個人の手元に安価に電子データが入手できるようになるなら、その持ち主の好みに添って本が書籍化されていく。自分だけの『カラマーゾフの兄弟』、私家版『陰翳礼讃』、ギフト用の『1Q84』、我が家オリジナル『広辞苑』など、少々値は張るが、版型や紙質、装丁などが比較的自由にカスタマイズができるようになる。

人々は今後ますます、多くのデータを抱えて暮らすようになる。写真、ブログ、メール、ツイッター……。加えて今後は電子データの小説、専門書、詩集……。データではなく本として持ちたいという欲求は決して小さくない。それらを書籍として物質化できるサービスがあるなら、それを実行に移す人たちが必ず現れてくる。

モニターの上に表示される像は、はかなく頼りない。自分で撮った旅の写真を写真集として手にすることができたらどんなに充足感があるか。丁寧に作りためた俳句を句集として親しい友人に手渡すことができたらどんなに感動的だろう。デザイナーた

ちは、その一つ一つに時間をかけてデザインすることはできないかもしれないが、装丁やレイアウトのアルゴリズムなら汎用用途に提供できるだろう。

テクノロジーは電子ブックを生み出す方向にのみ働いている訳ではない。一人一人の要望に応えて、一冊ずつから本が作れるようになる状況をも生み出していく。これまでは出版社が、本作りを代行していたわけであるが、その方式が一部崩れて、まずは最も安価に流通できる電子データとして多くの人々に配信され、しかるのちに、希望する人のみが、希望するかたちの本を具体化していく。そこでは再び「本」の出来映えが問い直されることだろう。

ともあれ、テキストと書籍の関係は、程よい緊張状態を再び取り戻すはずである。奇妙なものが多数生まれることで、本当に美しいものの意味もはっきりする。だから紙の本は、数は減らしても「情報の彫刻」としての輝きは失わないだろう。

百年先の未来はわからないが、僕らは今、この時代にしかできない仕事をしなくてはならない。電子化の波にさらされて緊張感を増す書籍。この状況を見誤って、(ウ)小さな未来を小賢しく先取りすることがないように、慎重に目をこらしつつ。

(原研哉「大量発話時代と本の幸せについて」池澤夏樹編集『本は、これから』岩波新書、岩波書店による。なお一部を改めた)

注

ツイッター＝インターネット上で一定字数の文章を書き込めるコミュニティ・サイト。また、そのサービスのこと。

タッチパネルデバイス＝画面をペンや指で押して操作する情報端末。

コモンセンス＝常識。

タイポグラフィ＝印刷術。文字の書体・大きさ・配列の仕方などのデザイン構成や表現。

カスタマイズ＝必要や好みに応じて変更すること。

アルゴリズム＝手順上の定型的な手法・技法。

汎用＝一つのものを広くいろいろな方面に用いること。

問1　[A]に入れるのに、最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問2　傍線（ア）の「都市もこれからますます『読み物』になっていくだろう」の説明として、最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

1　人間は、都市についての膨大な情報源を渉猟する過程を通して、自らの行動範囲をしだいに都市のすみずみにまで拡げていくだろうということ。
2　都市は、人間が操作する情報端末によって裏通りの細部に至るまで調べ尽くされ、やがて万人に閲覧される対象と化していくだろうということ。
3　人間は、他人の手によって取りまとめられた情報源に飽き足らず、刻一刻と自らの目的に見合った情報を進んで創造していくだろうということ。
4　都市は、人間に端末を通じて内部の詳細な情報を提供することで、本来の未知の生命体としての姿を徐々に明らかにしていくだろうということ。
5　人間は、情報の集合体としての都市から必要な情報を引き出して、今後さらに自らの要求を満たそうとする傾向を強めていくだろうということ。

問3　[B]、[C]、[D]に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選びなさい。

1　あるいは　　2　だから　　3　しかしながら
4　なにも　　5　それなのに　　6　すなわち
7　たとえば　　8　さらに　　9　とするならば

問4　傍線（イ）に「この傾向はむしろ望ましい」とあるが、その理由として、最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

1　電子のデータとしてではなく、紙の本として所有したい欲求を促すような魅力が引き出されてくるはずだから。
2　出版社や書店の一時的な数の減少はあるものの、将来的には業績が改善する方向へと進展していくはずだから。
3　ネットストアの躍進に伴って、電子ブックとしてコストを掛けずに流通させる利点が生まれてくるはずだから。
4　物体としての本やテキストの価値が再び発見され、結果的に電子ブックの風格や尊厳を高めていくはずだから。
5　電子ブックの普及によって、従来にはなかった選りすぐりの情報源としての意義が見出されてくるはずだから。

問5　傍線（ウ）の「小さな未来を小賢しく先取りすること」とはどのようなことか。最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

1　人間の真の幸福のあり方を追求することなしに、目先の利益ばかりに囚われて電子ブックを大量に制作すること。
2　電子化の風潮に乗じて、単にテキストの情報量やそれに伴う選択肢の数だけを爆発的に増加させて満足すること。
3　紙の書籍と電子ブックとの棲み分けを行わずに、品質の乏しいテキストを手当たり次第に印刷して製本すること。
4　情報化の現代において、大量に販売される電子ブックの中から必要な情報を収集し編集する能力を軽視すること。
5　モニター上の不定で移ろいやすい情報をそのまま紙の本にして、著者の積年の思いが達成できたと錯覚すること。

問6　本文の内容を表すのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

1　人間の幸福と本の尊厳　　2　大量発話時代と出版のこれから
3　電子ブックの可能性と限界　　4　書籍の電子化への懸念
5　ツイッターの登場と情報化社会

問7　『陰翳礼讃』の著者を、次のなかから選びなさい。

1　芥川龍之介　　2　永井荷風　　3　萩原朔太郎

4　川端康成　　5　谷崎潤一郎　　6　三島由紀夫

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　原　研哉＝はら　けんや（一九五八〜）岡山県生まれ。武蔵野美術大学卒。同大学院修了。同大教授。日本を代表するグラフィックデザイナーである一方、著書も多数。『デザインのデザイン』（サントリー学芸賞受賞）『白』などは東大・早大をはじめ現代文入試にも頻出

●『カラマーゾフの兄弟』→ロシアの文豪、ドストエフスキーの小説。他に『罪と罰』が有名

●『1Q84』→日本の小説家、村上春樹の小説。翻訳論やエッセイでも評価が高い。『職業としての小説家』はおよそ文筆に関わるすべての職業人にとっても参考になる

●『広辞苑』→岩波書店が編集出版している国語百科事典

●芥川龍之介＝あくたがわ　りゅうのすけ（一八九二〜一九二七）主要作品『羅生門』『戯作三昧』『河童』『歯車』新思潮派

●永井荷風＝ながい　かふう（一八七九〜一九五九）主要作品『あめりか物語』『ふらんす物語』『腕くらべ』耽美派

●萩原朔太郎＝はぎわら　さくたろう（一八八六〜一九四二）主要作品『月に吠える』『青猫』『氷島』口語自由詩

●川端康成＝かわばた　やすなり（一八九九〜一九七二）主要作品『伊豆の踊子』『雪国』一九六八年ノーベル文学賞受賞。授賞式講演「美しい日本の私─その序説」新感覚派

●谷崎潤一郎＝たにざき　じゅんいちろう（一八八六〜一九六五）主要作品『刺青』『痴人の愛』『細雪』耽美派

●三島由紀夫＝みしま　ゆきお（一九二五〜一九七〇）主要作品『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』

語句

夥しい＝おびただしい→非常に数が多い様子
信憑性＝しんぴょうせい→確かで信頼できること
能動＝のうどう→積極的に自ら動くこと。他者にはたらきかけること
深奥＝しんおう→奥深くてはかりしれないこと
コモンセンス→共通感覚。常識
雑駁＝ざっぱく→矛盾する知見が混在するなど統一されていないこと
顧みる＝かえりみる→良し悪しをじっくり考えること
希有・稀有＝けう→存在する量がきわめて少ない様子
装丁＝そうてい→ブックデザイン
醸し出す＝かもしだす→ある気分や雰囲気をそれとなく発すること
私家版＝しかばん→公的、組織レベルではなく、個人レベルでまとめたもの
汎用＝はんよう→広い用途で使用できること
cf.凡庸＝ぼんよう→平凡。ありきたりでつまらないこと

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）空欄補充のテン型的問題を解く　①典　②展　③添　④天　⑤点
（イ）新聞に意見を投コウする　①校　②行　③稿　④綱　⑤降
（ウ）外国からの宿ハク客を接待する　①拍　②迫　③泊　④伯　⑤舶
（エ）外部の機関と連ケイする　①継　②系　③経　④形　⑤携
（オ）記事をヘン集して出版する　①編　②偏　③返　④変　⑤片
（カ）該トウする項目を多数挙げる　①頭　②当　③灯　④答　⑤党
（キ）コ客の依頼に誠実に応える　①顧　②故　③個　④雇　⑤庫
（ク）ショウ味期限を表示する　①商　②称　③消　④章　⑤賞
（ケ）大臣の業セキを比較する　①責　②績　③積　④席　⑤蹟
（コ）工作機械にハン用性を求める　①繁　②版　③汎　④帆　⑤販

模範解答

第一講　模範解答

問1　4
問2　2
問3　5
問4　2
問5　イ　2　ロ　1　ハ　2　ニ　1　ホ　2
問6　イ　1　ロ　2　ハ　2　ニ　2　ホ　1

第二講　模範解答

問1　喉元過ぎれば熱さを

問2　(2)　E　(4)　D

問3　異質

問4　ア　B　イ　A　ウ　A　エ　B　オ　B

第三講　模範解答

問1 A

問2 E

問3 (3) A　(4) C

問4 C

問5 D

第四講　模範解答

問1　リアリティ

問2　5

問3　B　7　C　6　D　3

問4　1

問5　2

問6　2

問7　5

復習問題解答

復習問題　第一講　模範解答

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）④　（オ）①

（カ）③　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）②　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）含意　（イ）維持　（ウ）分節　（エ）態度　（オ）誇張

（カ）看板　（キ）志向性　（ク）増幅　（ケ）危機　（コ）情緒

復習問題　第二講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）①
（カ）①　（キ）④　（ク）②　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）管轄　（イ）配慮　（ウ）排出　（エ）覇権　（オ）緩衝地帯
（カ）障壁　（キ）元凶　（ク）潜在　（ケ）陰謀　（コ）甘受

復習問題　第三講　模範解答

（ア）④　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）④　（オ）①
（カ）④　（キ）②　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）固有　（イ）農耕　（ウ）擬人化　（エ）狩猟　（オ）模倣
（カ）凝縮　（キ）儀礼　（ク）収穫　（ケ）神格化　（コ）既定

復習問題　第四講　模範解答

（ア）①　（イ）③　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）①
（カ）②　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）典型的　（イ）投稿　（ウ）宿泊　（エ）連携　（オ）編集
（カ）該当　（キ）顧客　（ク）賞味　（ケ）業績　（コ）汎用

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。